恒之進　江戸から戻る

平成二十九年三月(改訂　七月)

恒之進の江戸の旅日記は次の三冊があります。

・下り(江戸へ向かう)日記など　縦68㍉　横198㍉
・上り(江戸からの戻り)人馬帳　縦68㍉　横198㍉
・差出資料(手本、控など)　縦68㍉　横198㍉

●恒之進　江戸での買物

表紙に「上り人馬帖」と記載されている資料を紹介します。上り人馬帖には(安政四年)十月九日品川を出て十月廿四日の大津までの宿屋の記録、持ち帰り品(買物)の記録、勤め関連などの書式資料が書き残されています。「恒之進江戸へ」では江戸での日常生活に必要な炭、米などの買物を紹介しました。ここでの買物は高知へ持ち帰る品々です。一見、爆買いのようです。江戸への道中で買った品も含めると次のようになります。翻刻が出来ていない箇所、字が判明してもその品物がどのような物か不明のもありますが、分かる範囲で補足しています。全く不明の品などここに記載していないのもあります。

一　お土産(女性用　男性用)
懐中袋　三徳　小三徳　三徳　四ツ
煙子入　唐津煙草筒入　煙竹入弐ツ　原扇　百本　きアまん盃　十枚
江戸繪六十枚　雪踏　三足　下駄　七足

二　依頼の品(測量機器ヵ)
岡地■目(利弥太注文)　凡分度(竹村節之助注文)

三　着物・布関連
馬乗袴　苧梶用布　極上苧梶　木綿糸　白黒　木綿　婦とん

四　刀剣などの関連
柄袋弐ツ　大小拵一切　革柄鮫　結荷釼
具足櫃　轡壹口

五　あかり関連
馬乗灯燈　馬乗桃灯　箱灯燈　カラ㋮イ

六　雨関連
合羽簑　黒合羽　陰合羽　乗掛合羽
□□□合羽　但しエリびろふど□　合羽籠　桐油　傘袋
傘袋　加籠　笠之　桐油　具足櫃　桐油

七　太鼓
太鼓　西洋太鼓

八　その他
□印　□黒下迠紋付ル　松魚節□壹匁位　不そひき
■ふさん　にふせん　黒大豆　荷結紐

◆　**具足櫃**　甲冑を入れ運ぶ箱です。江戸へ向かう八月廿九日に大井川渡付近で購入したとの記載があります。下写真は家に残っている具足櫃です。これには家紋が描かれていますので即日購入できないと思います。上りで持ち帰った記録もありませんのでこれとは別物の可能性がありますが、例として紹介します。下写真の櫃の大きさは縦・横　四十一センチ　高さ　五十六センチです。

◆　**三徳**　皆が鼻紙を用いるようになって懐中物の鼻紙袋ができ、これに鏡、ようじ、小銭を入れる仕掛けをつくって三徳、その後筥迫(はこせこ)となったとあったので、女性の持ち物と思いました。これは思い違いで「重要文化財《三徳　坂本龍馬使用》があります。恒之進は龍馬の少し上ですので、その頃の若い男性の流行りだったのでしょうか。

◆　**苧梶用布　極上苧梶**　梶などの意味は不明ですが、カラムシ(苧)の繊維(麻に似る)を紡いだ布と推定しますが、

苧環(オダマキ 糸巻き)の模様が女性に好まれたともあるので、それを染めた反物かも知れません。

◆ **下駄** 下駄を七足購入。平尾道雄著・土佐藩経済工業史に「下駄は天保年間 小高坂部落民、江戸製に模して製作」とあることから購入したのが安政四年ですので、山北付近では下駄は珍重品で購入したことも考えられます。

◆ **雪駄** 竹の皮の草履の裏に獣の皮をつけた履物。千利休が雪中で用いたのに始まるという。雪踏とも書く。

雪駄は土佐藩経済工業史には宝永五(一七〇八)年に「大阪雪駄師庄兵衛を呼び種崎町で製造」とありますので、下駄ほど珍しいものではなかったと思いますが、何故か購入しています。

◆ **あかり関連** 提灯など高知にもあるでしょうから、江戸で購入不要と思いますが、色々の種類を購入しています。カラペイは全く不明ですが、前述の提灯と一緒に購入(下写真左側の赤枠)しているのであかり関連と推測しました。

◆ **箱灯燈** 下中央写真の形状で上下に丸く平たいふたがあり、畳むと全体が丸箱に入ったようになる火袋の折りたたみできる提灯。写真の提灯は最近、制作した提灯です。

◆ **太鼓と西洋太鼓** 西洋太鼓は不明。

◆ **桐油・具足櫃／合羽籠／笠之** 桐油は柿渋と同じような防水で「アブラギリの種子から得られる赤黄色の油。乾燥が速く、耐水性がある。日本では古くから桐油紙・番傘などに使用」とあります。桐油が品別に購入しています。それぞれの品質の違いは不明です。

◆ **合羽** 合羽は数多く購入しています。高知の雨に泣かされていたのでしょうか。

● □□□合羽 但しエリびろふど□ 合羽の上の字(□□□)などは翻刻できませんが、但し書の「エリびろふど」より左写真の合羽(写真上段がビロード襟)と推測します。

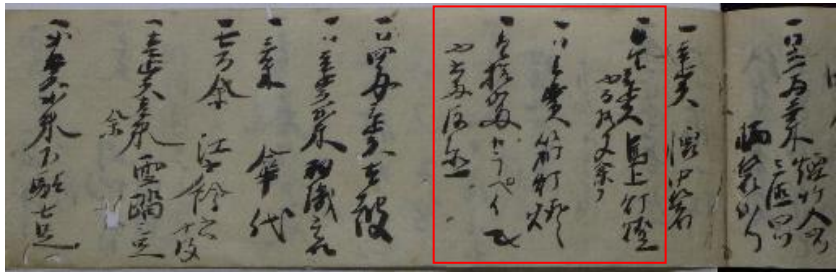
● 合羽簑は簑で作った雨具です。江戸へ向かう八月廿九日に大井川渡付近で購入しています。この頃、大雨で大井川を渡ることできない足止めとなっています。そのため合羽簑を新たに購入したのか、買い直したのでしょう

● 乗掛合羽 街道筋で馬に荷を載せ人も一緒に乗るのを乗掛馬と呼びこの乗馬時に着る雨合羽でしょう。

● 黒合羽、陰合羽は不明

◆ **凡分度 岡地■目** いずれも利弥太など縁者の注文で購入となっています。右写真の機器は家に残っているもので、製図用分度器(写真右側)、象限儀(土地の高低角を計測(写真左側))です。品名の一方は虫食いで読めない字があります。また、恒之進が購入した品名と異なりますが、多分この品と同等と推測します。

◆ **松魚節□壹匁位** 購入した安政時代に松魚(かつお)節高知にあったと思うので味の違いでお土産にしたのかも知れません。



◆　**黒大豆**　黒大豆は丹波篠山が名産地。味噌・醤油を作っていたのでその原料大豆は生産していたでしょうが、黒大豆は珍しく思い購入したのでしょうか。

◆　**婦(ふ)とん**　持ち帰るように購入したのか、生活用に購入したのを持ち帰ったのか。

◆　**不そひき、■ふさん、にふせん　口印　口黒下迫紋付ル**　不明。

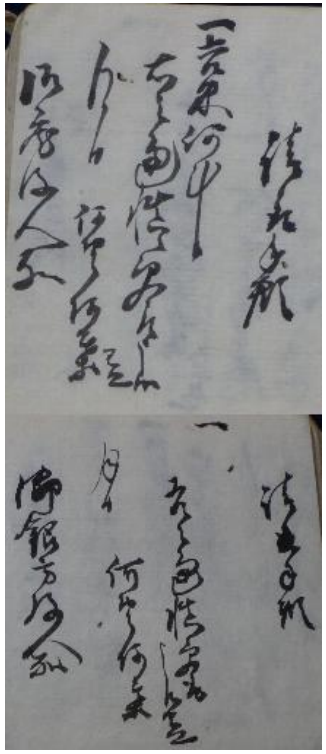
●恒之進の江戸生活・・出張マニュアル

提出資料の書式が残っておりました。下に示すように日付が月日のみ、名は何野何某と書かれいるので提出した資料の控えではないです。江戸の生活だけでなく、大坂に到着したら大坂の屋敷に行き、このような書式で届を出すなど記載された資料があります。今で云う出張マニュアルのようです。勤務関連が多いですが、生活関連のもあります。勤務関連のものを「恒之進江戸へ」の記事に合わせて二点紹介します。

二ヶ月に一回御扶持米が渡されていました。これに対して領収書を各自が出すようになっており、米と現金の二種類(下右写真　上が米、下が現金)があります。給与・賞与が振込になる前、現金で渡され領収印を捺した覚えがあります。

もう一つが欠勤届です。用語「刻改」について「上御屋敷ニテ刻改を受」「帰リ懸上御屋敷ニテ刻改を受帰る」とあります。指定された時限に屋敷に行っていたようです。昭和初期、徴兵を免除され在郷の人に課せられた点呼と呼ぶ勤め「ある期間ごとに指定された場所に行く」に似ています。この届を病欠する場合、家来が代行でき、提出する資料の書式(下左写真　一部読み解き出来ていない)もあり、家来の出入札も書込むようです。家来の門入出の札申請の書式もあります。

生活関連とは、江戸での生活を送るための情報の提供です。その一つが飛脚の情報です。飛脚の窓口の場所(下左側写真　町飛脚居處／日本橋南通壹丁目／横町在也／江戸屋)及び手紙の出し方が並んで掲載されています。高知独自の飛脚「村送り便」がありました。飛脚は窓口に持ち込むようですが、村送り便はどうだったのでしょうか。



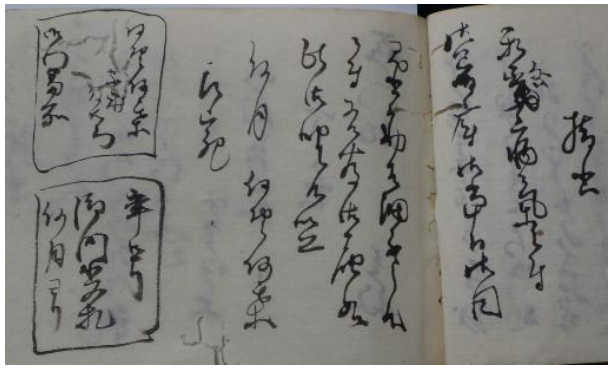
請取手形
一吉米何斗
右之通慥受取申し候
已上
月日　何野何某
御座役人所

請取手形
一
右之通慥受取
申し候　已上
月日　何野何某
御銀方役人所

指出
私義病気ニ付
御着府御当日御目
見出勤者細子義
ニ付有存御届如
此御座候以上
何月　何野何某
左宛

何野何某
家来
何右衛門
御門番所

年号
御門出入札
何月ヨリ



●恒之進の江戸往きと藩命

恒之進の旅日記が三冊あることを紹介しています。三冊目からの話題です。この資料は差出、指出、口上覺などの表題が付いた文書が綴じられています。これらは下書きあるいは手本で、これらを見て清書した書類を提出したのでしょう。これらの資料の日付は江戸に到着した辰九月のものが大部分です。その後書くことが無かったのか、書いたが紛失したのかは不明です。

それらの中に袖扣を書き出しとした文書(次頁写真)がありました。袖扣とは「状況を考えずお願いすること」だそうです。この書き出しの袖扣はこれまでの安岡の文書では見掛けませんでした。提出したかは不明ですが、これを深読みしました。

恒之進の江戸往きは安政三年から四年の一年間でした。その直前の安政一年十一月に安政地震が発生しています。山内公記史料に次の緊縮通達が記載されています。

安政二年是月　震災に因る經費節減のため諸侯の行列服装其他を簡略にすへき旨幕令に接す

安政二年の参勤の高知發駕が八月十五日、恒之進より八日遅く出発し江戸到着は九月二日で恒之進の到着九月六日で追い越しています。恒之進の江戸往きで扶持米を貰っていることから藩命によることは確かです。参勤に随行すれば良いと思うのですが、前の通達に従い簡略化で随行させなかったのでしょう。

地震で土佐藩財政は復旧工事などで財政窮乏の状況で新たに郷士を雇い扶持米などを給與し、江戸で勤務及び勉学させる余裕があったのでしょうか。その頃自費で長崎に覺之助などは行ってますので、このような意欲ある人を選べば良いと思うのですが、何故、恒之進達に江戸往きの藩命が出たのでしょうか。

下に提示した文書を翻刻すると次のようになります。

袖扣

私共此度臨時
御用を以御當地江
被□□依之出足
当日ゟ三人扶持
參拾匁被下候□
聊□仕九□奉存候
仕□武終儀耳□相
應武蔵用イ者仕
處最速之儀■
公之費用筋江■
□候□□乍恐■
乃儀被仰付候金子
過拂底耳相来
向端御扶持之儀
ハ右御渡被仰付様
上ハ路不足ニ而者
無御座候得とも
御當地參込御當
節子而安□と
不被仕義奉存相
應文武修行
■■度相處
■■□扱□□
□入費稍ニ而
如何共相求□□
不而已御用添ヲ以

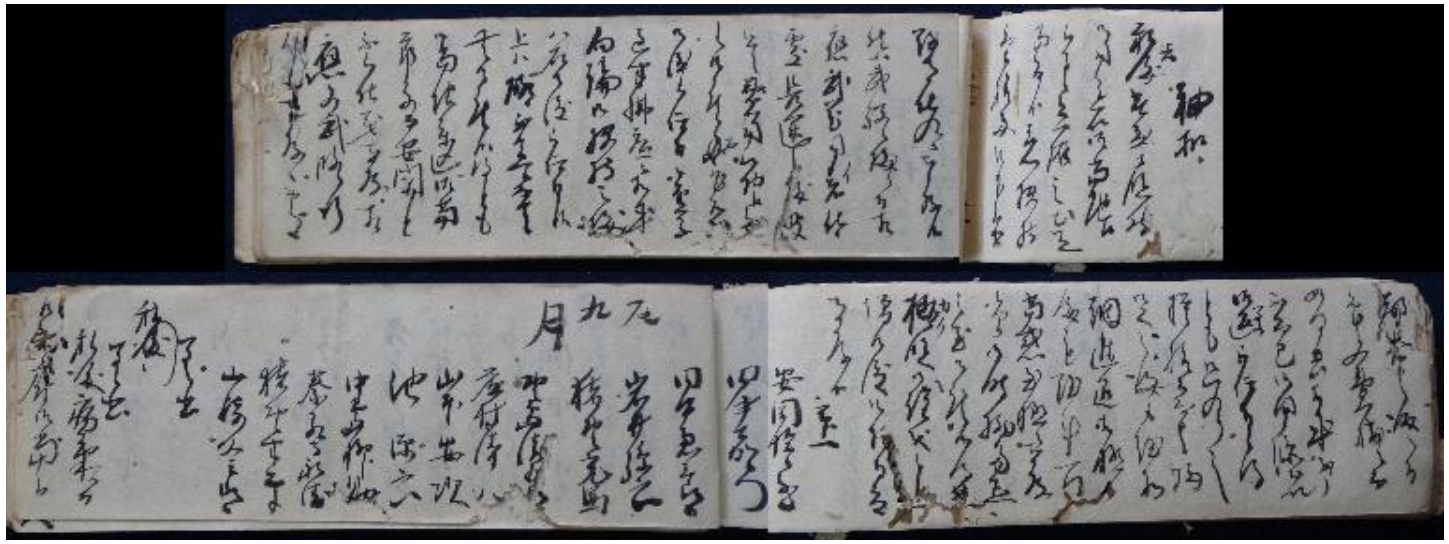
御返被仰付候得
とも□□□
□様ニ而者□
足之為も□相
調進退相極候
及こと難斗一同
当惑至極ニ奉存
候間御時價多恐
之至御座候得共
カイ段御□□■
増御渡被仰付度
有存候

巳上

安岡恒之進
田中嘉右門
田□免三郎

辰　岩井孫六
九　猪埜光馬
月　中島清五■

藤村清八
山本安次
池源六
中島柳助
秦泉寺永衛
猪埜半平
山傳久之助



地震による財政窮乏を考慮すると、正規社員の上士でなく非正規社員である郷士を江戸に送り財政支出の抑制を図った。それでも遅配が発生し窮状を訴えていると読みました。恒之進、岩井孫六、山本安次、秦泉寺など香美郡の郷士が多いようです。ここに江戸往きに選ばれた理由の解明の糸口があ

るかも知れません。

●恒之進　江戸からの荷物運び

一年の江戸赴任が終り、帰国です。前述の爆買した品物を持ち帰ります。箪笥など大きな荷物を送る手段もあり、前述のマニュアルにその利用方法が記載されていますが、買物の品々を荷造りをして、持ち帰っています。

その荷は次の通りです。

結荷印　長九寸三歩
壹ツ　ハヾ六寸五歩
縦九寸

荷物札　長さ約三十センチ
幅　約十九センチ
高さ二十七センチ

一結荷　長弐尺五寸
半駄□弐ツ　高壹尺壹寸
ハヾ壹尺三寸

荷物　半駄(両側掛けで二個)
長さ約六十二センチ
高さ約三十三センチ
幅　約四十センチ
＊この荷を結ぶ紐も購入しています。

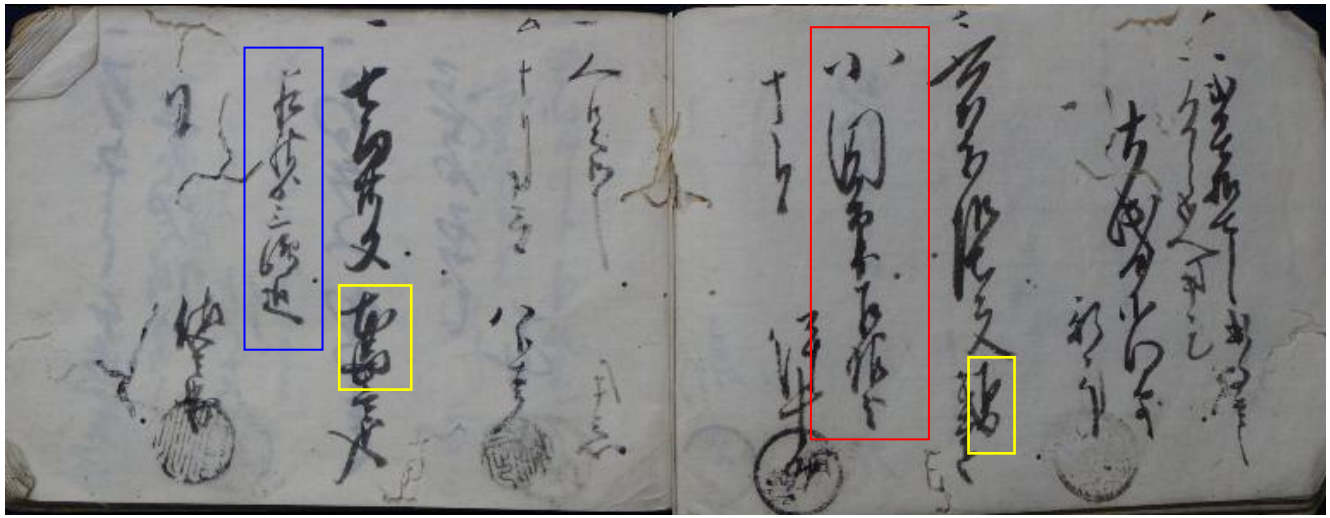
札弐枚
一結荷灯燈　壹ツ
但　小　八千□土州伊野□出

但し書き　詳細不明
＊大きなキャリーバック二個でしょうか。

これら荷物は馬に載せ運んでいます。その記録(抜粋)左が翻刻と下が原本の写真です。

①弐百七拾七文本馬壹疋
②□弐人用意
③大磯ゟ小田原
④　新市◎
六百五拾七文本馬壹疋
小田原ゟ箱根迠(下赤枠)
十二日　伊助◎
人足　用意
十月十三日　八□吉◎

七百廿文　本馬壹疋
箱根ゟ三嶋迠(下青色枠)
同　徳兵衛◎
百五文　本馬壹疋
三島ゟ沼津
□ス　佐右衛門◎
百六文　本馬壹疋
沼津ゟ原迠　喜水◎



① 先頭行が支払費用と馬の使用方法と頭数
② 雇う人足の人数　費用は場所距離で異なるよう
③ ｘｘゟｙｙが馬の始点と終点
④ 馬及び使用人を貸し出した宿の主人名
◎ 丸の捺印

宿場に馬が置いてあり、これを宿場ごと雇い繋ぎ荷物を運ぶことができたようです。その馬の使用方法に三種類　乗掛馬、本馬、軽尻があり、乗掛馬は人が乗り荷物運ぶ、軽尻も人が乗り荷物(軽い)を運ぶ、本馬は荷物のみを運び人は歩くようです。右記のように恒之進は本馬(右黄色枠)を利用しています。

これらの三種の馬利用方法で費用が異なり、さらにコースによっても違いがあるようです。右の支払で記録に平地の大磯ゟ小田原は弐百七拾七文ですが、天下の嶮の箱根越えの小田原ゟ箱根六百五拾七文、箱根ゟ三嶋七百廿文で平地の二倍以上の差があります。

●恒之進　江戸から戻る

岩井は日記に、安政四年九月十日江戸を出て、京都見物して十月七日に乗船するが、田野沖まで来て追風がなく室戸に十日に上陸しています。

恒之進は遅れること一ヶ月後の十月九日品川を出て大津に十月廿四日に着いています。ここまでは旅日記の宿帳記録にあります。その後は家に戻って提出した到着報告の控えが残っており、それによると廿六日伏見、廿八日 坂町着き、十一月一日に乗船しています。安政三年十月は小の月(月の日数が二十九日)ですので、どこにも寄らず船便願いを出し乗船、五日に浦戸に着き六日に山北戻っています。到着報告書を七日付で本山菱馬(山北を治めていた役人)提出しています。恒之進は江戸から山北まで二十六日間です。江戸に向かったときは二十九日間でした。下り(往き)は四国山越え、山陽道を歩き、寄り道、大井川などで足止めもあったのに、三日の差しかないのが不思議な気がします。大坂からの船便は楽だがそれ程スピードアップとなっていません。

その後、恒之進はもう一度江戸へ行く機会がありました。前回の江戸往きから七年後二十八歳の時です。これが死出の旅になります。

以上